

水稻の作柄に関する委員会（平成28年度第 2 回）の意見

1 8月15日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

- (1) 気温は、一部地域を除き、全般的に平年より高く推移している。また、日照時間についても、6月を中心に平年を下回る時期があったものの、おおむね平年を上回って推移している。

今後の天候の見通しでは、全国的に気温は高いと見込まれるが、北日本を中心に降水量が多く、日照時間の少ない状態が続くと予想されている。

- (2) 本年の水稻は、早場地帯ではもみ数が一部の地域を除き平年並み以上に確保されているとみられ、遅場地帯の生育もおおむね順調に推移しているものの、出穂期以降が高温傾向で推移していること等から、登熟や品質等への影響が懸念される。

また、8月中旬以降の台風第7号、第9号、第10号及び第11号による影響が懸念されるほか、いもち病や斑点米カメムシ類等の発生が多いと予想されている地域もある。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

- (1) 早場地帯においては、出穂後の高温及び8月中旬以降の寡照が登熟や品質に及ぼす影響に留意する必要がある。
- (2) 西日本の遅場地帯においては、5月末から6月にかけて寡照傾向となった一方で、8月以降、気温及び日照時間が平年を大きく上回って推移しており、今後も高温で推移することが見込まれることから、もみ数、登熟等への影響を見極める必要がある。
- (3) 8月中旬以降の台風第7号、第9号、第10号及び第11号の影響により倒伏等が発生した地域では、その影響を見極める必要があるとともに、今後の台風や集中豪雨等による作柄への影響にも留意する必要がある。
- (4) いもち病、斑点米カメムシ類等の病虫害の発生が多いと予想される地域においては、その発生状況に留意する必要がある。

3 次回のもみ数確定期調査の調査期日

本年の水稻の出穂状況は、一部で早まっているところもあるが、全般的にはおおむね平年並みと見込まれることから、次回のもみ数確定期調査は、例年どおり9月15日現在とすることが適当と考える。

【参考】水稻の作柄に関する委員会委員

- (座長) 雨宮 宏 司 公益社団法人大日本農会 技術顧問
 黒田 栄 喜 国立大学法人岩手大学農学部植物生命科学科（作物学研究室） 教授
 竹川 元 章 気象庁地球環境・海洋部気候情報課 予報官
 中園 江 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター
 生産体系研究領域東海輪作体系グループ 上級研究員
 平澤 正 国立大学法人東京農工大学 名誉教授
 山岸 順 子 国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構 准教授
 吉永 悟 志 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター
 水田利用研究領域北陸作物栽培グループ長

水稻の作柄に関する委員会（平成29年度第2回）の意見

1 8月15日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

- (1) 気温・日照時間は、6月に一時平年を下回る期間があったものの、その後、7月中旬頃までは平年を上回って推移した。7月下旬から8月下旬にかけては、東北太平洋側から関東の広い範囲で低温・寡照となり、西日本については高温傾向となった。

今後1か月程度の天候の見通しでは、気温については、9月第1週目に低温傾向、その後は平年並みか高い、日照時間については、ほぼ平年並みと予想されている。

- (2) 本年の水稻は、早場地帯ではもみ数が一部を除き平年以上に確保されていると見込まれるものの、東北太平洋側や関東地方を中心に7月下旬以降が低温・寡照傾向で推移したこと等から、登熟や品質等への影響が懸念される。

また、遅場地帯の生育はおおむね順調に推移しているものの、高温傾向で経過し、一部で寡照傾向となっていることから、もみ数や登熟への影響が懸念される。

さらに、いもち病や紋枯病、斑点米カメムシ類等の発生が多いと予想されている地域もある。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

- (1) 早場地帯においては、出穂後の低温・寡照が登熟や品質に及ぼす影響に留意する必要がある。
- (2) 遅場地帯においては、7月以降、気温は平年を上回って推移しており、一部で寡照傾向となっていることから、もみ数及び登熟等への影響を見極める必要がある。
- (3) 7月下旬の集中豪雨や8月上旬の台風第5号等の被害が見られた地域では、その影響を見極める必要があるとともに、今後の台風や集中豪雨等による作柄への影響にも留意する必要がある。
- (4) いもち病、紋枯病、斑点米カメムシ類等の病虫害の発生が多いと予想される地域においては、その発生状況に留意する必要がある。

3 次回のもみ数確定期調査の調査期日

本年の水稻の出穂状況は、一部で早まっているところもあるが、全般的にはおおむね平年並みと見込まれることから、次回のもみ数確定期調査は、例年どおり9月15日現在とすることが適当と考える。

【参考】水稻の作柄に関する委員会委員

- (座長) 雨宮 宏司 公益社団法人大日本農会 技術顧問
黒田 栄喜 国立大学法人岩手大学農学部植物生命科学科（作物学研究室） 教授
竹川 元章 気象庁地球環境・海洋部気候情報課 予報官
中園 江 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター
生産体系研究領域東海輪作体系グループ 上級研究員
平澤 正 国立大学法人東京農工大学 名誉教授
山岸 順子 国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科生産・環境生物学専攻作物学研究室
教授
吉永 悟志 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター
生産体系研究領域 領域長

水稲の作柄に関する委員会（平成30年度第2回）の意見

1 8月15日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

- (1) 気温・日照時間は、6月に平年を下回る期間があったものの、北海道を除き全般的に平年を上回って推移し、特に7月中旬以降は例年にならぬ高温で推移している。

6月末から7月上旬にかけて平成30年7月豪雨が発生し、西日本を中心に全国的に広い範囲で記録的な大雨となった。また、7月以降、相次いで台風が接近・上陸している。

今後1か月程度の天候の見通しでは、気温については、ほぼ平年並み、日照時間については、平年並みか少ないと予想されている。

- (2) 本年の水稲は、早場地帯ではもみ数が一部を除き平年以上に確保されているとみられ、遅場地帯の生育もおおむね順調に推移しているものの、7月中旬以降、記録的な高温で推移したこと等から、登熟や品質等への影響が懸念される。

また、紋枯病、斑点米カメムシ類等の発生が多いと予想されている地域もある。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

- (1) 7月中旬以降、例年にならぬ高温で推移していること等から、高温や水不足等によるもみ数、登熟、品質等への影響に留意する必要がある。
- (2) 北海道においては、6月中旬から7月中旬に低温・日照不足となったことから、その後の気象条件も踏まえつつ、もみ数、登熟等への影響を見極める必要がある。
- (3) 平成30年7月豪雨や台風等による冠水や倒伏等の被害が発生した地域や台風によるフェーンが発生した地域では、その影響を見極める必要があるとともに、今後の台風や集中豪雨等による作柄への影響にも留意する必要がある。
- (4) 紋枯病、斑点米カメムシ類等の病虫害の発生が多いと予想される地域においては、その発生状況に留意する必要がある。

3 次回のもみ数確定期調査の調査期日

本年の水稲の出穂状況は、一部で5日以上早まっているところもあるが、全般的に1～3日程度であることから、次回のもみ数確定期調査は、例年どおり9月15日現在とすることが適切と考える。

【参考】水稲の作柄に関する委員会委員

- (座長) 雨宮宏司 農林水産・食品産業技術振興協会 理事長
荒井裕見子 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構次世代作物開発研究センター
稲研究領域稲栽培生理ユニット 主任研究員
黒田栄喜 国立大学法人岩手大学農学部植物生命科学科（作物学研究室） 教授
竹川元章 気象庁地球環境・海洋部気候情報課 予報官
平澤正 国立大学法人東京農工大学 名誉教授
山岸順子 国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科生産・環境生物学専攻作物学研究室
教授
吉永悟志 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター
生産体系研究領域 領域長